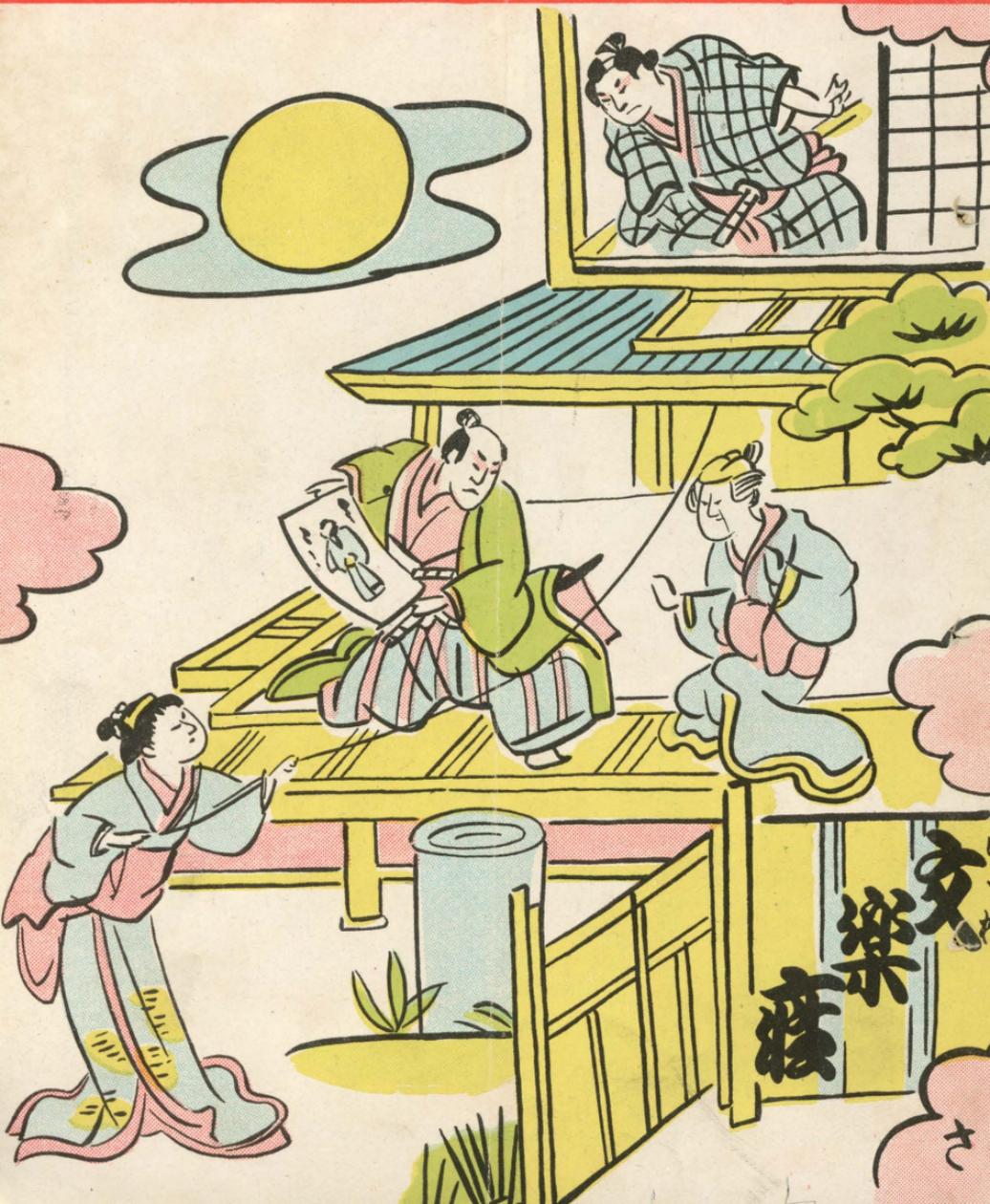


# 九人の飛騨瑠璃



楽交

# 九月の人の形浄瑠璃

——演出總形人・線味三・夫太——

(部 の 晝)

箱根靈驗 躰仇討

天神堤より饒別の段  
阿彌陀寺の段

天網島時雨炬燵

紙屋内の段

彌次郎兵衛  
喜太八

東海道膝栗毛

赤坂並木より古寺迄

★十三日より晝夜の狂言入替上演致します★

(部 の 夜)

奥州安達原

袖萩祭文の段

双蝶々曲輪日記

引窓の段

碁太平記白石噺

吉原揚屋の段

昭和十九年九月一日初日

初日 晝十二時・夜四時 二部  
毎日 晝十二時・夜五時 開演

●一部料金●

一等席 五圓

二等席 二圓四十錢

三等席 八十一錢

(各等入場税共)

一等御座席は五日前より  
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符専用電話

南④四七一一番

一般御用の電話

南⑥三〇三二番  
三七八八番

箱根靈驗壁仇討

天神堤より餞別の段

豊竹富太夫  
鶴澤友三郎  
豊澤新三郎  
竹本七五三太夫  
鶴澤綱造

妻	初花	桐竹紋十郎
庄屋	徳右衛門	桐竹紋太郎
飯沼	勝五郎	吉田光造
奴	筆助	吉田玉助
溝口	源左衛門	吉田玉徳
徳右衛門	女房	吉田兵次
兄	虎松	桐竹小紋
弟	芳松	吉田光次
下	川久馬	桐竹紋昇
下	男	吉田藤一
下	女	吉田常次
百	姓	大でい



箱根靈驗壁仇討

天神堤の段より餞別の段迄

大闇が伏見桃山城造營につき、普請小屋に勤める佐藤剛助は同役の飯沼三平を妬んで闇討にする。腹黒き剛助は北條に心を傾け、飛龍丸の寶劍を奪つて佐々成政と舅筒井順慶を陥れて自刃させ、鎌倉に赴き瀧口上野と名を改め北條の威を借りて權勢を振ふ。

北條の家臣に九十九新左衛門と云ふ者あり、

息女初花は絶世の美人で瀧口上野は之にきつい執心であつたが、却つて初花は下部の三千助に戀慕し、新左衛門も此の下部を導の者ならずと見て息女の婿にする。これ兄三平の仇をれらふ飯沼勝五郎である。

三千助の素性が知れると、瀧口からは首打つて渡せと嚴命、新左衛門は決心して切腹し初花勝五郎を落してやる、兩人は諸國を流浪して奥州路に至つたが、勝五郎は固疾を病ひ、足腰立たぬ覺となつて非人小屋の起き臥し、あまつさへ仇瀧口が詮議の相書が廻つて一命も危かつたが庄屋徳右衛門の情で餞別の覺車に乗り、貞節な妻初花に引かれて箱根に向ひ箱根權現の瀧にうたれて祈願をこめた。無惨や初花は敵の返りに會つたが、やがて箱根權現の靈驗現れ勝五郎は足腰立つて忠僕の筆助と共に瀧口を討つ。

阿彌陀寺の段

切竹本大隅大夫  
鶴澤清八  
朝号 鶴澤寛弘

飯沼勝五郎 吉田光造  
妻人初花 桐竹紋十郎  
非人なまこ 吉田多三郎  
同人あんこ 桐竹紋太郎  
非人あんの輪 吉田玉助  
瀧口上野 吉田玉市  
勿川久馬 桐竹紋昇  
母早蕨 吉田小兵吉

天網島時雨炬燵

紙屋内の段

竹本南部大夫  
鶴澤寛治太夫  
竹本伊達太夫  
野澤喜左衛門

紙屋治兵衛 桐竹政龜  
女房おさん 桐竹龜松  
丁稚三五郎 桐竹紋司  
男五左衛門 吉田玉徳

天網島時雨炬燵

紙屋内の段

この淨瑠璃は文藝近松門左衛門が一代の傑作といはれる名作で、享保五年十月十五日の明方大阪網島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすぐさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので、心中の白眉とされて居る。

紙屋治兵衛は男五左衛門の爲に少からぬ金子を融通したが、わざと茶屋酒に浸つて自から消費した様に見せかけた。その内に曾根崎新地の紀の國屋小春といふ遊女と馴染を重れ。今宵も揚屋の河庄で、江戸屋太兵衛と身請の張合。小春は死ぬほど惚れた治兵衛様だが其の兄の粉屋孫右衛門や女房のおさんに泣いて頼まれ、涙を吞んで治兵衛に愛想づかし、治兵衛は腹を立て、歸へる。小春は一人で死ぬ氣であつた。



紀の國屋 小春 吉田榮三郎  
 娘 お末 吉田龜夫  
 伴 勘太郎 吉田光次  
 江戸屋 太兵衛 吉田兵次  
 五貫屋 善六 吉田駒三郎

### 東海道膝栗毛

赤坂並木より古寺迄

喜多八 竹本重太夫  
 彌次郎兵衛 竹本七三太夫  
 和 尙 竹本伊達太夫  
 親 父 豊竹南部太夫  
 伴 千 松 豊竹司島太夫  
 彌次郎兵衛 野澤清二郎  
 喜多八 鶴澤友三郎  
 親 父 鶴澤新三郎  
 喜多八 鶴澤寛治郎  
 親 父 野澤喜左衛門  
 伴 千 松 吉田紋十郎  
 和 親 吉田多三郎  
 伴 千 松 桐竹小紋  
 和 伴 吉田小兵吉

紙治の宅では女房おさんは炬燵を温めて待つて居た。死ぬほど思ひつめた男と切れろさいふ小春の心底を思ひやるさ、おさんは自分の義理が濟まなくなり、衣類身のまわりのものを入質しても小春を家に入れ、自分は千守なりさして三人仲よく暮したいと云ふ。治兵衛も女房の貞操に泣き、小春



の實意もみえて今は板挟みである。所へ懸敵の大兵衛が小判を鼻にかけるのが癪にさわりつゝ及物三昧に及んで人殺の罪を犯してしまふ。  
 繩身の生き恥をさらすよりはさ、丁度死出の旅路の暇乞にきた小春と手に手を取つて大長寺を指して死に行く。

の段の内容は彌次郎兵衛と喜多八が赤坂並木で失敗し、喜多八は寺へ遁げこんである。彌次郎兵衛が死人の姿で尋ねて和尙に愚弄されるがそれは悉く狐に化されてゐたさ。いふ面白い彌次喜多道中記。

彌次郎兵衛 喜多八  
 東海道膝栗毛

赤坂並木より古寺まで

十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」の初篇が出たのは享和二年でこの東海道中膝栗毛の趣向をそのまま脚色したもので、こ

### 日章旗の下

大増産に

突進せよ

奥州安達原

袖萩祭文の段

竹本住太夫造  
豊澤重太夫  
鶴澤友衛門

娘 おきみ 吉田龜夫

妻 袖萩 桐竹龜松

謙杖直方 桐竹政龜

奥方 濱夕 桐竹紋太郎



奥州安達原

袖萩祭文の段

これは寶曆十二年の九月竹本座に初演されたもので、近松半二、竹本三郎兵衛、竹田和泉、北窓後一等の合作の全五段ものであります。

奥州後三年の役、阿倍貞任宗任と八幡太郎との戦争を骨子とし、これに平兼盛が古歌の「陸奥の安達原の黒塚に鬼こもれりさいふば誠か」に依つて謡曲に作られた鬼女の趣向を、潤色したものであります。

環宮御殿の譚り役謙杖直方は、阿倍貞任宗任等が爲に宮を奪はれ、その申し譯の爲に切腹せればならぬ破目に立つてゐた。

此の謙杖には二人の娘がある。妹娘の數妙は八幡太郎義家に嫁してゐるが、姉娘袖萩は、親の許さぬ男を持つたが爲に、今は勘當の身の上で、その行方すら知れなかつた。

霏々として降りしきる或る雪の日、數妙は父が此の度の落度を詰問の爲、上使として父の館を訪れたが、奇しくも此の日、又ここへ姿を見せたのは、盲目の身となつたうらぶれた袖萩であつた。袖萩は、勅勘受けて環宮へ移された。父の大事を知り、娘お君に手を曳かれて辿つて來たのである。

變り果てた娘の姿を見た直方は、愕然としたものの、何事と立寄る妻の濱夕を強ひて遮るのだつた。お、それと察した濱夕は袖萩に向つて願ひ事があれば、歌ふて聞かせよと、遣は女親、慈愛のこもる言葉をかけてやる。三味線とつた袖萩は、節も哀れに述懐の唄をうたつて、父に逢はせてと頼

安倍貞任 吉田玉助

安倍宗任 吉田玉徳

八幡太郎 吉田榮三郎

こし元大せい

仕丁大せい

# 双蝶々曲輪日記

## 引窓の段

中  
竹本住太 造夫  
鶴澤呂重太 門  
鶴澤友衛門

むので、濱夕はいろくこ取做すが、直方の怒りは解けず、夫が下司下郎でない證據に、袖萩が出す手紙を見れば、安倍貞任とあるのに驚愕は尙ひさしほであつた。直方は、逢ふ事はならぬと、詞鋭く云ひ放つと濱夕を引き立て、奥へ去るが、後では悲しさと寒さに袖萩が、癪に惱むのをお君が介抱する時、宗任が忍び出て懐剣を渡し、直方を討たれよと騒ぐのだつた。その途端曲者待てと叫んだのは義家である。

宗任は覺悟を定めて腕を廻した。が義家は、その首に日本國中放し飼の金札を掛けて立去らせた。

轉で濱夕を連れて出た直方は、貞任と娘の縁を結んだ申し譯に、腹かき切る一方袖萩も思ひ餘つて自害をするのだつた。其の時、桂中納言と名乗り、勅使に化けて来たのは貞任であつた。この貞任の桂中納言は直方に向ひ、空々しくも、後は宜きに取り計ひやらんと言ひ残して、悠々歸りかけるのだつた。が、響き来る陣鐘大鼓の音に思はずたちるぐ時、立ち出でた義家は、

彼を貞任と見顯はし娘は我が養ひやらんこ情のこもる詞をかけるのだつた。と、白旗に一矢を射掛けて走り出た宗任が、兄弟して本意を遂げんと義家に迫るのを、逸るな……と止めた貞任は、後日戰場での再會を約し、衣冠正しく行きかけたが、娘お君に纏られて愁然となる。



# 双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

本曲は寛延二年七月(二四〇九)竹本座上場。竹田出雲、三好松落、並木千柳合作で全九段からなる。かの近松作「壽の門松」(享保三年正月)二三七八竹本座(上場)と西澤一風、田中千柳合作「昔

豊竹古靱太夫  
鶴澤清 六

奥兵衛の母 吉田小兵吉

女房 お早 吉田文五郎

濡髪長五郎 吉田玉市

南方十次兵衛 吉田榮三

平岡丹平 吉田玉徳

三原傳造 桐竹紋昇

米萬石通)「享保十年正月二三八五〇  
豊竹座上場)を併せて趣向を立てたも  
の。尙、第二相撲の場、第四米屋の場、  
第六橋本の場と共にこの第八引籠の場が  
有名である。

當時浪華に知られた關取に、濡髪の長五

郎と云ふのが居たが、長五郎はかれ〴〵山  
崎奥次兵衛には一ト方ならぬ恩誼をうけて  
ゐたので、その若旦那奥五郎が、藤屋の吾  
妻を身請けするに就ては双肌ぬいで奔走を  
續けてゐた。

處が吾妻には郷右衛門と云ふ武士も執心



で、此の方にも身請け  
話が持上つてゐたが、  
それには放駒の長吉と  
云ふ關取が肩を入れて  
ゐた。

折も折、土俵の顔合  
せが濡髪と放駒と云ふ  
ことになつた。互ひに  
人氣相撲のこゝろで、  
双方の最負の聲援はも  
の凄く、小屋も割れん  
ばかりの盛況であつた  
が、此の時の勝負に濡  
髪は、態と相撲を振つ  
てやつたのだ。それは  
云ふまでもなく、吾妻

# 碁太平記白石噺

## 吉原揚屋の段

傾城 宮城野 (竹本南部太夫 竹本伊達太夫)

妹 おのぶ 豊竹宮 太夫

宮 里 豊竹司 太夫

宮 柴 豊竹松島 太夫

大黒屋宗六 (竹本住太夫 豊竹呂太夫)

豊澤仙 糸

のこさを放駒に頼みたい爲であつた。だが、勝ち誇つた放駒は、一向そ知らぬ顔であるのだ。二人の間は喧嘩になつて、遂には茶碗の礫が飛んだ。

性來喧嘩好きの放駒は、茶碗のかたをつけるま云つて、濡髪を我が家へ呼び寄せて喧嘩をしかけたが、放駒の喧嘩好きを心配してゐる姉のお關は講中の衆を頼んで長吉に盗人の汚名をつけ、不心得を意見した。

又長五郎も、共々意見をするので、始めて長吉の心も和ぎ、此處に濡髪を放駒は、目出度く和解して、改めて腕の血をすすり合ふ仲になつた。

その後濡髪の長五郎はフトしたこから廓で人を殺め、お尋ね者となつて落ちて行つた先は八幡村の南與兵衛方——今は侍に取り立てられて、南方十次兵衛と名乗る其家だつた。

與兵衛の義理の母お幸は長五郎の實母なのだ。

苗字帯刀まで許され、村方の取締をする與兵衛は、既に人相書まで廻つてゐる此の

長五郎を召し捕れば大手柄になる。然し母の心を察しては義理ある兄弟に無下にも繩はかけられない。こは云へ、暮六つ過ぎれば與兵衛の役目はどうしても長五郎を見逃しには出来ない。與兵衛の女房お早も夫の心をそれま知つて、引き窓を明けては態々未だ日が高いま云ふ。與兵衛もそれまなく河内への抜道を教へて長五郎を落してやらうとする。

一方、これも義理にせめられる長五郎は、堪り兼ねて與兵衛の繩にかからうとするが、流石は肉身、母は彼の前髪を剃落し、姿を變へて迷さうとする。

折柄、與兵衛が打つた錢の礫が長五郎の高頬の黒子を落した——是も人相を變へさせて義理ある兄弟を助けん爲めの與兵衛の情に他ならない。

長五郎も母も、今は與兵衛の役目を全うせしむるのが人の道と覺悟を決めるが、引窓から差し込む晝の様な明るい月の光に「夜が明けた、身共が役は夜の内許り——」と、與兵衛は長五郎を逃すのだつた……。

傾城 宮城野 吉田光造

禿 しげり 桐竹小紋

女郎 宮里 吉田常次

女郎 宮柴 吉田藤一

やり手 かや 吉田駒三郎

娘 おのぶ 桐竹紋司

大黒屋宗六 吉田玉市

# 碁太平記白石噺

吉原揚屋の段



安永九年正月(二四四〇)から江戸外記座に上演された全十一段もの。作者は烏亭焉馬、紀上太郎、容揚齋の合作。

女郎の宮里、宮柴二人が宮城野の許へ来て、昨日淺草から連れられて来たしのぶの噂。果ては宮城野の慰みにさ嫌がるしのぶを無理無體に引立て、来たが、遣り手にたしなめられて座敷へ行く。

跡に宮城野、此田舎娘の故郷は奥州、姉が吉原で名高い女郎になつて居ると聞き、遙々尋ねて江戸へ出た云ふのが氣に懸かり、奥州は何の邊か聞けば、白石在の逆井村、父さんの名は興茂作と隠さず答えるものだから、驚く宮城野。

が、妹のしのぶは姉さまなりや證據がある筈、さ油断せぬので、言はれて其れさ氣付いた宮城野、床に飾つた壺井の守を出し

て見せる。しのぶも首に掛けた守を見せ、始めて姉妹の名乗をした上、互の嬉しさ、懐しさ、抱き合つて咽び泣く。

宮城野が、妹を引寄せて父母の安否を尋ねるさ、しのぶは思はず泣伏したが、また氣を勵まして父は五月田植の時分、代官志賀臺七に討たれて非業の最後、母は其悲しみが病の因で果敢なくなられたと語る。

宮城野は聞いて胸潰れ、癪をおこして苦んだが、妹に介抱されて漸う氣付く。而して、そんな事さば露知らなかつた父母の最後を歎いたが、また屹さ氣を取直すさ。江戸にあるてう許婚の夫を尋れた上、親の敵を討たいで置かうかさ、小棧から上げて身捨て、奥の騒ぎに紛れて廊を逃出さうと妹を連れて立ちかかると、宗六が現はれ、様子を聞いたは表に出さず、意味あり氣に止めるので、さては始終を知られたかと思ゆる姉妹、懐劍抜いて斬りかかると、宗六は鏡台の鏡を取つて受止め、假名本の曾我物語、恰度在合ふを譬えに引いて頼もしく語るの、宮城野しのぶも合点がゆき、身にも胸にも餘る有難ささ掌を合はせる。

# 文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

- 竹本座創立 (現今ヨリ二百五十九年以前)  
貞享元年二月 (道頓堀西ノ芝居)
- 文樂座發祥 (現今ヨリ約百五十年以前)  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地演時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎權時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始  
メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

## 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一体の人物活瑠璃の日本唯一の公演場でございます

文樂座人形淨瑠璃は 昔に大阪の誇りとすする舞台藝術のみならず日本に於ける古典舞台藝術の至寶として世界に誇るべきものであります、従つて開演毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが、尙御氣付きの

貴重品は 各自にお持ち下さいませ、お座席をお立ちの時は御携帯を願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひを致します。お席では御遠慮下さいませ。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階にお座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶対にお断り申上ます。

御休憩の間は 二階西側に大休憩所の設備が御座ります。御辨當御持參の御方は何卒御利用下さいませ。

出演者 病氣其他の事故にて出場不能の場合は乍勝手代役にて相勤めますれば右様御諒承を願ひ申上ます。

★お客様 (特にお願申上ます)  
物資不足の折柄、洵に恐れ入りますがお下駄履きのお客様は晴雨に不拘なるべく上草履を御持參下さいませ、特にお願ひ申上ます。

尚、靴草履のお客様はそのまま入場して頂きますので至極便利でございます

松竹株式會社  
支配人 大橋照夫  
電話南 三〇三二番  
三七八八番  
四七一一番

昭和十九年八月廿八日印刷  
昭和十九年九月一日發行  
發行所 松竹株式會社大阪支店・發行者 鳥江鏡也・印刷所 ミカド印刷合資會社  
大阪市南區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店內  
大阪市東區和泉町一丁目二  
一部金十五錢

